

# 南方（その他）

## ガダルカナル島戦記

愛知県 三 矢 猶 吉

大正八年四月生まれの私は、昭和十四年徴集の現役兵として昭和十五年四月豊橋の歩兵第十八連隊補充隊歩兵砲中隊に入営、翌十六年五月南支の宝安に上陸、沖三七五〇部隊（独立速射砲第二大隊）に転属となり、十二月八日大東亞戦争が始まると直ちに九竜半島に進出した。

昭和十七年三月には赤道を越えて「チモール」島西端の「クーパーン」に上陸、二か月間警備に従事、さらにジャワ島に移動してそこで四か月間警備につき、九

月十二日には「ソロモン」群島に到着した。

昭和十七年六月五日のミッドウェー海戦に敗れた日本は、制空権を失っていった。目指すはガダルカナル島であった。当時の状況は兵隊には判らないが何か大変なことが待ち受けているような気がした。

昭和十七年十月三日頃、仙台の第二師団と共に十六隻の駆逐艦に乗り、ガダルカナル島の西北岸クサファロング付近に上陸。

歩兵第二九連隊（会津若松）の主力と共に独立速射砲第二大隊（大野部隊）は海岸道を暗夜を利して、東方のルンガ飛行場奪回を目指して前進した。

上陸当時の大野部隊兵力は三個中隊で六百五十六名であった。

毎日、歩兵部隊と共に敵を撃退しつつ、十月七日に

はマタニカウ川右岸の線まで進出し、飛行場は間近になった。

しかし米軍は、反撃に転じ、猛烈なる砲撃と空からの爆撃に加え、海からの艦砲射撃の熾烈極まる攻撃に死傷者が続出した。隊長は現位置の確保は困難であると判断し、マタニカウ川の西方三キロの沖川の線に後退したのであった。

飛行場制圧地の後退は、ガ島総攻撃の困難化を示唆する。この時期大野部隊も一部参加していると思われるが詳細不明で、なお相当数の犠牲者がある筈である。

主力は沖川の東方二キロの勇川付近で待機中であつた。特に海岸地帯は遮蔽物は少なく地形的には我が方にとって全く不利であつた。

毎日三〜四回にわたる艦砲射撃、地上からは十分から十五分間隔の迫撃砲の砲撃、空からの爆撃と機銃掃射にと全く濃密度ある計画された米軍の攻撃によって、その被害は日と共に増し、その激しさは計り知れないものがある。それと共に糧米もますます少なくなり、

一日二合だったのが一合と半減し、栄養失調およびマラリア患者も再発して、我が方の戦力はますます減退していった。

十月二十四日十七時、いよいよ我が軍の総攻撃である。

歩兵部隊を先頭に敵の猛烈な迫撃砲火の中を敵歩兵部隊と攻防戦を展開しつつ前進をする。翌二十五日になると敵の防禦砲火はますますその熾烈さを増し死傷者続出、第二十九連隊長古宮正次郎大佐、第十六連隊長広安寿郎大佐も戦死されるに至つた。

そして二十六日六時、攻撃中止の命令が下り、ルンガ飛行場攻略は三度不成功となる。全く残念でならぬ。

二十六日の昼間の敵の砲爆撃は特に物凄い攻撃だつた。

折角多くの犠牲者を出しながら、再度後退の止むなき状況に追い込まれ、遂に暗夜のなか反転を繰り返して沖川の線まで後退した。

大野部隊も約半数の犠牲者を出し、残りの半分は傷

病者で戦闘可能な者は僅か約百五十名になってしまった。

大野部隊長は残余の将兵諸君の生命を、この大野に預けてくれ、次の攻撃には思い残すことなく存分に戦い抜こう。それまでは無駄死にすることなく敵の砲爆撃から身を守れ、と頭を下げて切々と訓示激励をされた。

十一月三日遂にその運命の日が来た。薄明かりをついて敵戦車六両が歩兵を伴い来襲、我が第一線歩兵部隊と交戦中との報告を受け、我が大野部隊に出撃命令が下り、直ちに戦闘に耐え得る者全員約百五十名は傷病者を現位置に残し勇躍出動し、第一線に到着するや直ちに壕を掘り陣地構築して砲を据え待機すること暫くして、待望の敵戦車六両が前進してきた。

大野部隊長は戦車を出来るだけ引き寄せて一斉射撃の命令を下した。この時とばかりに射ちに射ちまくった。

敵戦車は突然の速射砲の攻撃に多大の損害を受け直ちに退却していった。しかし米軍は速射砲陣地の存在

を知ったので、今までにない激しい砲爆撃を加えてきたため遂に大野部隊の砲は破壊され、全滅の悲運に見舞われたのであった。

息もつかせぬ砲爆撃のすきに周囲を見廻しても健全な者は見当たらない。戦友の動かない屍が重なり傷ついた者を手当する薬も無く、いかんとも為すすべが無い。

暗くなるのを待って数十名の負傷者と共に患者班の待機している沖川の線まで後退したが、途中においても敵の包囲下の脱出ゆえ数名の戦友を失ったのであった。

沖川の患者班の位置に到着した時、健全なるは三矢ただ一人であった。

沖川に退っても米軍の毎日の日課通りの猛烈なる砲爆撃は全く変わらなかった。

食無く、薬無く、次々と死傷者は出るばかり、その中の重傷者は水無川付近の第二師団の野戦病院へと運ばれて行くが、皆ほとんどが昇天したのであった。

部隊長以下死傷し、私はただ一人となってしまった

ので、近くの部隊の指揮官に申告し、しばしの間その部隊に転属となり行動を共にしていたが、残念にも食糧のことで員数外の扱いをされた。糧米の欠乏していた時に他からの一時的な兵隊では仕方の無いことではあるが、同じ日本人でありながら何とということであろうか。

日が経過するにつれて栄養失調はますますその度を加え、その上に下痢を併発して体力は弱り、歩くのに苦痛を感じるようになってきた。そしていつのまにか独りだけの生活になっていた。

独りになれば食糧は自分で確保しなければならない。米は入手困難だから艦砲射撃で倒された浜椰子の若芽を集めることが日課になり絶食の日も度々となった。

昭和十八年一月二十日頃、部隊はエスペランズに集結してルンガ飛行場に逆上陸を敢行して全員玉砕するという情報が流れ、散在する各隊が陣地離脱を開始したので私も遅れじと弱り切った身体に鞭打って部隊の後を追った。

前線からエスペランズ（島の北西端）まで約六十キ

ロある。一日約四キロぐらいの速度で、やっと辿り着いた。途中の惨状は言葉にならない。地獄とはこれというのかもしれない。

「どうか連れていってくれ」とすがり着かれてもうにもならない。心を鬼にしてやっと二月七日の最後の第三次撤収に間に合った。暗い海岸で待機することしばらく。そのうち待ちに待った小発のエンジンの音を聞き本当に嬉しかった。

小発が到着すると一斉に艇の舷にすがりつくが、どうしても自力で艇の中に入ることができない。その時艇の乗員が手をさしのべてくれて引きずり上げてくれた。とたんに全身の力が抜けて座り込んでしまった。助かった実感が身内に湧き出た。

長い間多くの戦友と共に戦い、共に励ましあった、あの苦しかったことが走馬灯のように脳裏に浮かぶ。

大野部隊六百五十名の靈魂天に在って我れの撤退を守るか。また瞑せずして地に咽び泣くか。奇しくも天佑か神の助か、最後の撤退に間に合うとは。これも散華した戦友の靈魂の加護でなくてなんであろう。御霊

に対し冥福を祈りつつ別れを惜しんだ。正に断腸の思いなり、駆逐艦は暗夜の海を全速力で一路ブーゲンビル島へと急ぐ。

ガ島よ、さらば

私はその後「マニラ」陸軍病院に転送され内地陸軍病院退院、昭和十九年四月除隊となる。

ガダルカナル島の争奪戦における日本軍の損害は、

戦死 八千二百

餓死または病死 一万一千

合計 一万九千二百名

にのぼる。

幸い撤退に成功した者も皮をかぶった骸骨の様相を呈し死亡する者続出したが、生き残った兵隊は比島を経てビルマの戦場に送られ命を失った者多数という。戦争の冷酷さの標本ともいわれている。

私達は中野中佐以下戦死者の慰霊のため愛知県三ヶ根山の山頂に忠魂碑を建て戦績を記して霊の永遠に安らかなれと祈っている。

## 【解 説】

破竹の進撃をした陸海軍は昭和十七年五月頃、南方要域を攻略し、米國と豪州を遮断する作戰を計画し、五月十八日、第十七軍(沖)が編成され、軍司令官は百武晴吉中將であった。その編成は概要次の通り

南海支隊(第五十五師団、当時楯部隊) 歩兵第一四  
四連隊—高知—基幹

歩兵第三十五旅団(歩兵第百十四連隊—小倉—欠)

青葉支隊(第二師団の歩兵第四連隊基幹)

歩兵第四十一連隊(第五師団の一部)

であった。しかし、連合軍の反撃は激しく歩兵第二十

八連隊(第七師団)の一木支隊が八月十八日、ガ

島上陸、二十日夜攻撃失敗。

続いて九月十二、十三日の川口支隊(歩兵第三十五旅団長、川口清健少將)が急派され、夜間攻撃失敗。

逐次戦闘加入は連合軍を甘く見た結果であった。このため、大本営も現地軍も、まずガ島を奪回して南太平洋の戦局を好転させるべく、本格的準備にかかり、いよいよ泥沼のガ島戦が本格化したのである。

執筆者三矢氏の所属する独立速射砲第二大隊は、満州から第十七軍直部隊として転属し、防諜名に「沖」が冠されたのである。同部隊が配属された仙台編成の第二師団（勇）主力は、公刊戦史によれば、十月三日以降逐次、海軍艦艇によってガ島に輸送されたことは三矢氏が述べるとおりである。

第二師団の戦闘概要は次の如くである。

同師団等の輸送、上陸に対しては、連合艦隊は全力をあげ掩護し、戦艦「金剛」「榛名」以下は十三日夜、その主砲で、ルンガ飛行場を砲撃した。

第二師団主力は、ルンガ飛行場の南側方面から米軍の側背部を急襲することとなりジャングル道を啓開しつつルンガ川上流に向かった。将兵は糧食と兵器弾薬を背負って、急坂に苦しみつつ進んだ。総攻撃は十月二十四日及び二十五日夜行われたが、第二步兵団長那須少将以下多数将兵が斃れて攻略は失敗した。そのころ連合艦隊は第二師団の総攻撃に策応するため出撃したが、ソロモン北方海上で米機動部隊と遭遇し、南太平洋海戦が起こり、第二師団援護は出来ず、陸軍のガ

島奪回攻撃も失敗に帰した。

その後、第三十八師団（沼）の上陸も米海軍の妨害により（第三次ソロモン海戦生起等）、人員及一部の軍需品揚陸に終わり、戦闘力を補充することが出来なかった。爾後、補給は駆逐艦または潜水艦による風輸等により、武器弾薬、食糧、医療品等の補給はほとんどなく、文字通りの餓島となった。

十二月三十一日、大本営はガ島の兵力を後方の線に撤収することに決し、翌一月四日、これを発令した。撤収は二月一日、四日、七日の三次にわたり、毎回駆逐艦二十隻で実施された。これに対し米軍は、これを増援、補給輸送と誤って判断したため、撤収は予想外に順調に行われた。撤収総人員は陸軍約九千八百名、海軍約八百三十名である。しかし、戦没者数は陸軍約二万八百名、海軍約三千八百名で、計二万四千六百名である。

ガ島戦については、多くの戦史が刊行もされ、体験記等も記述されているが、第二師団長が、ガ島上陸後軍命令を受領し、十月二十日、午前十時、師団攻撃の

ため下達した命令（勇作命甲第一七三号）は次の如くである。

### 軍隊区分

右翼隊 長 歩兵第三十五旅団長 川口少将

歩兵第二百二十四連隊（福岡編成）第三大隊、歩兵第二百三十連隊（第三八師団、静岡）（二大隊欠）、迫撃砲第三大隊第三中隊、独立速射砲第六大隊、同第九中隊、独立山砲兵 第二十六大隊、工兵第二連隊の一中隊、衛生隊三分一。

左翼隊 長 第二步兵団長 那須少将

歩兵第二十九連隊（会津若松編成）、迫撃第三大隊、  
◎独立速射砲第二大隊ノ一中隊、野砲兵第二連隊第二大隊、独立山砲兵第十連隊、工兵第二連隊ノ一中隊、歩兵第二百二十四連隊、挺身作業隊、衛生隊三分一。

予備隊 長 歩兵第十六連隊長 廣安大佐

歩兵第十六連隊（新発田編成）、

工兵隊 長 工兵第二連隊長 高橋大佐

工兵第二連隊、工兵第七連隊ノ一中隊、独立工兵第

十五連隊ノ一小隊

輜重隊 長 輜重兵第二連隊長 新村大佐

輜重兵第二連隊、北尾部隊（一〇〇名及工兵第七連

隊ノ一中隊欠）

師団直轄部隊

師団通信隊、衛生隊（三分ノ二欠）、野戦病院、第六十七兵站病院ノ一部、第七十六兵站病院、第二師団防疫給水部、第二十四防疫給水部ノ一部、第二師団兵器勤務隊

以上

独立 速射砲第二大隊（沖三七五〇部隊）略歴

十七年九月二十九日 ジャワ島スラバヤ港出発、

シヨートランド寄港。

同年十月十日 ガダルカナル島「サタコアング」上

陸。

同年十月十七日 「ガ」島攻撃及撤収作戦に参加。

十八年二月三日 ポーゲンビル島エレベントに於い

て人員資材充足し次期作戦準備と同地付近の警

備。

同年七月七日 部隊充員。

同年七月八日～八月八日 二個中隊を第六師団歩兵連隊に配属、本部及二個中隊はムンダ海岸付近の陣地確保に任ず。

同年八月九日～九月三十日 ムンダよりコロンバガラ島に転進、歩兵第十三連隊に配属、飛行場付近の陣地確保に任ず。

同年十月十五日～十九年四月三十日 十月中旬ポーゲンビル島エレベントに復帰、部隊充員及整備同時に第九中隊二〇〇名と併合。

歩兵第十三連隊に配属シタロキナ作戦に参加、解散まで「マワレカ」―「ジャバ」海岸の防御戦闘に参加。

十九年六月一日 現地復員せるも、十九年七月まで現態勢のまま海岸防禦任務続行。

同年六月一日～五日 第一回「マワレカ」「ジャバ」の戦闘に参加。

同年六月二十日前後 第二回「マワレカ」「ジャバ」の戦闘に参加。

解散後転属次の如し、歩兵第十三連隊（第六師

団熊本編成）二二九名、二十三連隊（都城編成）一四三名、歩兵第四十五連隊（鹿児島編成）一三名、その他九部隊 計五一八名 合計 九〇三名。

## レンバン島多根岬

茨城県 猪瀬良一

日本の無条件降伏を知ったのはマライ半島北端の町、スンゲーパタニーにあった第三陸軍病院分院であった。

マライ中部マラッカ海峡沿岸の町、ポートジクソン、シルサの南方軍下士官候補者隊（臨時に予備士官学校として使われた）を卒業した見習士官二百八十名と共にビルマ方面軍へ転属のため軍用列車で北上中、真性にチフスにかかり、タイ領ハヂャイの第四野戦病院に入院したが、昭和二十年四月十五日と記憶している。幸にも一命をとりとめたものの、容易には体力が回